

道元禪の体系的会得 序説

杉 尾 玄 有

一 禪師自身の意向

道元禪ないし『正法眼蔵』の体系的解釈は、すでに何度か試みられている。しかし、それはすべて近代になつてからのことであつて、古来の注釈は、おおむね体系には無関心であつたように思われる。最も古く最も權威ある注釈とされる、鎌倉末期成立の『正法眼蔵抄』（以下『御抄』と略称する）にも、体系的解釈への志向は見られない。その後は、江戸時代以降に多くの注釈が著わされるのであるが、体系への無関心は永く続いた。体系的解釈が本格的に現われかけるのは、昭和も十年代に入つてからである。このように、体系的解釈が古い時代に見られず、近代に至つて始めて現われかけたとしても、それだけで体系的解釈が不当であることにはならぬであらう。無論、近代的解釈なるゆえに正しいということにもならない。『眼蔵』が体系的に読まれるべきものであるのか、ないのか——そのことについて、確かな決め手はただ一つあるのみであらう。すなわち、道元禪師はたして『眼蔵』を体系

的に説こうとしたのであつたかどうか、という禪師自身の意向が最後の決め手とならねばならぬ。もし、禪師自身が何らかの体系を志向していたとするなら、参究者がそれを無視することは全く不当である。また、もし、禪師自身が体系を拒否していたとするなら、それを無視して体系的に道元禪を解釈することは、やはり不当といわねばならぬ。なおこのほかに、第三のケースとして、禪師自身としてはいわば随筆的に筆をとつただけで、ことさら体系を意識したわけではないが、われわれ後人からすればそこに体系性の有無を問題にしうる、という場合もありえないわけではない。考えられるケースは以上三つであつて、三つのケースの何れかに道元禪は当てはまるはずである。しかし不可解なことに、いままでこのような観点において禪師の意向が積極的に探られたことは、ほとんどなかつたのではあるまいか。

二 立場の体系と悟りの体系
禪師が一百巻もの『眼蔵』を著わそうとしたとき、そこに

何らかの体系が目ざされていたと考えるのが自然であろう。しかし、一百巻を著わし終るより、はるか以前に、禪師は惜しくも入滅した。九十巻内外の『眼藏』が遺されているからとて、一百巻の撰述完了が近かつたのだと考えてはならない。九十巻内外の『眼藏』のほとんどが暫定稿でしかないと思ふべきもののようであり、そのうちには、禪師自身によつて抹殺されるべきであつた何巻かも含まれている、と考える方が正しいであろう。そういうわけで、『眼藏』の撰述計画や編集状況から禪師の思想体系を確実に探り出すことは、いまのところかなり困難と思われる。

それでは、個々の述作から思想体系を探り出すことはできないか。一二三一年に記された『辦道話』が第一に注目されねばなるまい。その冒頭で禪師はまず総論を展開し、天童如浄より正伝した仏法の核心を端的に説き明かしている。続いて十八問答とよばれる各論において、個々のあらゆる重要問題につき、一問一答の形式を借りて詳論している。そうして、最後に、坐禪の儀則については四年前に撰述した『普勸坐禪儀』によるべきことなどを説いて結語としている。『辦道話』のこのような論述形式を概観しただけでも、そこに体系的論述の意図は明瞭に読みとれると思う。十八問答の内容にも立ち入れば、その意図はさらに明確となる。かれが正伝した仏法は仏教全体の中でどういう位置を占めているか。かれがど

ういう坐禪観・戒律観・生死観・宗教観・宇宙観等に立つのであるか。また、修行と悟り、心と体、出家人と在家人等の問題について、かれの見解はどうであるか。——このように、およそ道元禪について考えられるすべての問題がここで問われ答えられている。それをこの一巻の総論や結語とともに眺めわたせば、そこに体系的に完結した一つの仏法世界が開示されていることを、誰も否定しえないであろう。

しかし道元禪師は、この『辦道話』の体系をもつて満足したのであろうか。『辦道話』は啓蒙の書である。禪師は當時、正法を伝来した直後でありながら、思うところあつて積極的布教の活動を中止し、世を遁れて時機の到来を待つ身であつたが、それゆえ、世の求道者が正師に出会えずして惑うのをあわれんで、かれらのためにこの『辦道話』を記したのである。その啓蒙の姿勢は、とりわけ十八問答の部分に現われている。啓蒙的に水準を下げて説いたということはない。それは、第三・第四・第七・第十問答等の格調の高さをみれば、疑問の余地がない。ただし、問答が十八項目までもわたつた結果、いかにも冗漫にして老婆心切にすぎる嫌いはまぬがれまい。正伝の仏法を知らぬ道俗に、始めて正伝の仏法の立場を他と区別しつつ誤りなく伝えるためには、『辦道話』の冗漫な体系が必要ではあつた。しかし、正伝の仏法を中心は、はるかに簡潔な体系として示されうるし、せひ示されねばなら

ぬであろう。後年、禪師が『眼蔵』をみずから編んだとき、『辨道話』はそれに収められなかった。その事情について詳しいことはわからないのであるが、一つには禪師自身が『辨道話』の冗漫と老婆心切とを嫌ったからではないであろうか。『辨道話』と全く対照的に、きわめて簡潔な体系をなす一卷を、禪師は七十五巻本『眼蔵』の第一巻として収めた。『現成公案』がそれである。

『辨道話』は、始めて正伝の仏法の立場を詳しく道俗に知らせようとしたものとして、いわば立場の体系を説いているといつてよい。それに対していうなら、『現成公案』は悟りの体系を説いている。しかし、『現成公案』の簡潔にして充実した悟りの体系を的確に捉えた注釈は、まだ現われていないように思う。伝統的注釈は小異を含みながらも、大筋においてほぼ同じ立場に立つている。そして、その発端はいうまでもなく、上掲の『御抄』にある。『御抄』は『現成公案』の題目の意義を説いて、「公」は「平不平」を意味するが、それは「不平をなほして平とする」（不平を平らぐる）ことでなく、「平（と）不平（と）が」一と心得「ねばならぬのだという。また、『案』（按）は「守分」（分を守る）を意味するが、「守るべき」分際あるべくは、こなたの「こちらの、正しい」仏法とは取るべからざるもの」にて、分際を超えて一つであることが「守分」だ、というふうに説く。そしてまた、「第一〔巻〕の現成

公案にて第七十五〔巻〕の出家まで、同じ義を述ぶるなり」ともいう。要するに、平・不平を超え分際を超えて、万法を一つと見る『現成公案』の主旨が、七十五巻の『眼蔵』のどの巻にも、くりかえし説かれているのだ、というのが『御抄』の見解のようである。

このように、万法を一つと見る『御抄』の、いわば同一性の立場が、後世の『眼蔵』解釈を規定してきた。その同一性の立場では、『現成公案』の体系的構造も当然ながら見いだされることがなかった。しかし、一百巻もの『眼蔵』をあえて著わそうとした禪師の意図を、同一性の立場のみで推しはかることは、いささか無理ではあるまいか。伝統的解釈を一旦はなれて、道元禪師が諦視した原事実そのものをわれわれも見しつ『眼蔵』を読むならばおそらく『現成公案』はその固有の体系的思想構造を始めて露呈しきたるであろう。

紙数が限られているので、詳論は別稿によるしかない。いまは要点だけをいえば、原事実の反映・展相として成り立つこの実相界（現実世界）の諸相を四項に絞って論明しつ、原事実そのものへの開眼を迫る——それが『現成公案』一卷を著わした禪師の意図であつたのであり、その意図がそのまま体系的構造として表現されているのである。かの原事実そのものは、只管打坐・身心脱落の当体そのものであつて、これを無といひ恁麼といひ古仏心といひ般若といひ、あるいは

庭前柏樹子・祖師西来意等々というよりほか、言詮の及びようがない。そこをいま禪師は「現成公案」の一語で衝いているのである。そのかぎり、「現成公案」の意味を説明せんとするあらゆる試みは失敗するほかないであろう。しかし、原事実が言詮不及・言語道断のままにとどまるならば、『眼蔵』の撰述はありえないし、道元禪の体系化も考えようがない。言語道断なる「現成公案」の原事実を、あえてその展相としての実相界の本質に迫つて体系的に道破せんとするところに、まさしく道元禪師の古今に独歩する面目はあるのである。

『現成公案』本論（すなわち序段を除く）は四段に分けられ、その四段は順次、自他不二・起滅不二・性相不二・修証不二をその論点とする。第一の自他不二が実相界のいわば空間構造を示すのに対し、第二の起滅不二はその時間構造を示している。そして、そのような時間・空間構造において成立する実相界の成立根拠が、第三に性相不二という形でつかまれるのである。そのような実相界の本質を人間が自覚しゆくことが悟りであるが、いいかえれば、実相界が人間においてそれ自身を自覚しゆく作用、それが悟りである。さて、実相界の自覚作用としての悟り（証）は修行をはなれてありえないことを説くのが第四、修証不二の段にほかならない。——われわれの生きる実相界は、これら四原理によつて捉えつくされるのであつて、これに加えることは不必要であり、これより

削ることは不可能のはずである。

三 体系の透脱

このように、道元禪師は、『辨道話』において立場の体系を説いただけでなく、『現成公案』において明らかに悟りの体系をも説いている。このことが明らかとなつた以上、われわれはもはや道元禪を、単に漫然と非体系的に受けとめることも、また意識的に非体系化することも、許されぬこととなつたはずである。近代に入つてようやく現われてきた種々の体系的道元禪解釈の試みについても、いまや一々その当否が吟味しなおされねばならぬであろう。

しかしながら、単なる体系的解釈が道元禪参究の終極であつてよいであろうか。『現成公案』における悟りの体系を形づくる四原理は、禪師自身の提示するところであつて、決してわれわれの単なる恣意的設定ではないであろう。それにもかかわらず、これら四原理から成る体系構造にいたずらに執心することは、道元禪の没却以外ではありえない。四原理を究めた上で、一旦これを透脱して体系の核心に直入するとき、われわれは始めて原事実と一つになつて、原事実そのものを生きるのである。そのとき始めて悟りをも透脱して真に道元禪がわれわれにおいてわれわれを生きるに至るであろう。